



冬はつとめて 雪の降りたるは いふべきにもあらず
枕草子 - 清少納言

29 チャレンジ精神の旺盛なひつじ

最近、ネタ不足で休刊が多いあられ's 通信。今月もネタがなく困っていたところ、朝刊にデカデカと校正に関する記事が掲載されていました。中日新聞なのでローカルネタかと思いきや、午後にはYahoo! ニュースの主要タブにも取り上げられていました。

【「岐阜信長 歴史読本」の大量誤植のニュース】

実際の誤植の内容は各メディアのニュースで確認することが出来ます。また、本を購入して、報道されているもの以外の誤植を見つけて発表している人もいますようです。しかし、校正に携わる会社の人間として気になるのは、誤植の内容ではなく、「なぜ大量の誤植があるままで出版されたのか。」です。

あられ's 通信 Vol.26 で取り上げましたが、出版にいたるまでにはいくつもの工程があります。フェイルセーフの考え方から、仮に一つの工程で作業漏れがあったとしても、別の工程でフォローする仕組みになっています。フェイルセーフは、「ミスは起きるものだ」という前提に立った考え方です。

初校であれ、校了前であれ、校正作業はいつでも「一つの校正漏れもしない」ことを目標としています。一方で、工程は「校正漏れはあるものだ」という前提で組まれているのです。「一つの校正漏れもしない」ことを目標とした校正作業と、「校正漏れはあるものだ」という前提の工程の仕組みで、ミスだらけの教材が出版されることを防いでいます。

【ミスが発覚したときの対応】

先日、あるクライアント様から、弊社が校正を担当した塾用教材で指摘漏れの報告がありました。制作プロダクションを含め3社で並行してチェックしていたが、アラレスとは別の1社だけが拾っていたとのことでした。「3社で並行してチェック」という段取りがフェイルセーフとなっているのですが、結果アラレスのミスが明らかとなりました。アラレスでは担当した教材のすべてを翌日までに急遽再チェックし、報告を頂いた以外にも指摘漏れがあることが発覚しました。残念ながら、最初のアラレスの納品物では「一つの校正漏れもしない」ことを目標とする作業ができていなかったのです。

既に印刷が始まっていたのですが、クライアント様に新たに見つかった指摘漏れを報告しました。「他の2社でもスルーされており既に印刷されてしまっていたが、製本前だったので台(16ページ単位のユニット)の差し替えで済みました。ミスがあるまま、塾様へ納入してしまうという事態を回避できました。」とご連絡がありました。(…とはいえ、廃棄になってしまう台の分の費用が発生したことになります。)

大変ありがたいことに、このクライアント様からは、引き続きアラレスに業務の依頼を頂いております。「今回ミスはあったが、アラレスは今後も教材制作の工程に組み込むに値する。」と判断していただいたのだと思います。

【「一つの校正漏れもしない」ことを目標とした作業】

アラレスと外注スタッフとの関係にも同様の判断があります。アラレスでは複数のスタッフに校正を依頼していますので、集約作業をしていると一方の外注スタッフの指摘漏れに気づくことがあります。次回も業務を依頼するかどうかは、「一つの校正漏れもしない」ことを目標として作業をしているかという点で判断することになります。(教科書改訂期の狭間は案件自体が少なく、なかなか次回の業務が依頼できないケースもありますが、…)

業務連絡

毎月初めには、前月分の請求書(印入り)のご提出をお忘れなようよろしくお願いいたします。

近年の人工知能(AI)の進化はすごいですが、その背景にはビッグデータの活用があるそうです。

世の中には、本当にたくさんの教材があります。それらを活用できたら、いつかAIによる「完全に一つの校正漏れもしない」作業が実現しちゃう感じがします。そうすると、フェイルセーフは「作業途中で電源を切らないこと」だけになっちゃうかもしれないですね。



文責：沈黙のひつじ